

訓蒙化學

中川謙二郎編述

上卷

610
4
= 4
2667
1



門二 4
 號 2667
 卷 明 1

許免權版日四十月九年三十

610
 47
 2

中川謙二郎編述

訓蒙化學

闡微館藏標



早稲田大學圖書館
 冊 2610 215
 藏書

製版調堂陽東京東

訓蒙化學序

化學序

何ソ以テ造化ノ秘奧ヲ開キ事ノ物ノ理
 スル所ノ開鑰ナリ之レニ二類アリ一ハ心
 理ニ関シ一ハ物理ニ関ス心理ニ関スル者ハ無
 形精神界ノ諸學科ニシテ物理ニ関スル
 者ハ有形物質界ノ諸學科ナリ化學ハ
 即チ物質界ニ屬シ宇宙萬物ヲ組成スル
 原質即チ元素ヲ講究スルノ學ナリ抑モ
 宇宙ノ構造ハ無數ノ太陽系統相連結

川蒙化學

闡微館藏標

2667
明1

610
47
2

中川謙二郎編述

訓蒙化學

九年九月十四日

第2667号



化學序

何ソ以テ造化ノ秘奥ヲ開キ事ノ物ノ理
 明カスル所ノ開鑰ナリ之レニ二類アリ一ハ心
 理ニ関シ一ハ物理ニ関ス心理ニ関スル者ハ無
 形精神界ノ諸學科ニシテ物理ニ関スル
 者ハ有形物質界ノ諸學科ナリ化學ハ
 即チ物質界ニ屬シ宇宙萬物ヲ組成スル
 ノ原質即チ元素ヲ講究スルノ學ナリ抑モ
 宇宙ノ構造ハ無数ノ太陽系統相連結

川蒙化學

圖文官成辛

シテ成レル者ニシテ彼ノ無數ノ恒星ハ即チ各
 系統ノ太陽ナリ太陽系統トハ太陽ヲ中心
 トシテ幾多ノ游星及ヒ太陽之ヲ環繞セル者
 ナリ其游星ノ一タル我地球ノ構造ヲ觀ルニ
 土石金類ヲ以テ固體部ヲ成シ水之レカ液
 體部ヲ成シ空氣氣體部ヲ成ス動植物
 ハ此三部ニ類テ其生ヲ成ス凡ソ生物非生物
 之ヲ解キ之ヲ碎キ猶分析シテ止マサル時ハ遂
 ニ優々異種ト為ス可カラサルノ極點ニ至ル可シ

是レ二類ノ物ヲ分解シテ至極ノ成分ニ及ヒタ
 ル者ニシテ始テ化學ノ範圍ニ達セリトス此事
 獨リ我地球ノミニ非ス兩間ノ物皆實ニ然ラ
 サルハナシ是ヲ以テ凡ソ一物トシテ化學ニ關セ
 サルナキ得テ知ルヘキナリ今此學ノ起原ヲ踪
 ヌルニ早ク既ニ支那埃及ニ在リシコト蓋シ疑
 ヒナシ往時東洋ニテハ木火土金水ヲ以テ五
 元素ト為スノ説アリ西洋ニテハ火土水氣ヲ以
 テ四元素ト為スノ説アリ又賤金ヲ煉テ貴金ト

為スノ説ニ至テハ當時東西盛ニ行ハレタリ爾
 来西洋ニ在テハ術ト理ト駢ヒ進ニ遂ニ今日
 ノ學ヲ成スニ至ル東洋ニ在テハ此學子ニ聞セ
 ル寔術染術及ヒ冶金術等ノ進歩ナキニ
 非スト雖モ之ヲ助クヘキ理論ニ至テハ數百年
 間依然トシテ面目ヲ改メス今日西洋ノ化學
 ヲ見テ古今東洋未發ノ學ト認ムルモ亦之
 カ為メナリ西洋化學ノ術始メテ我邦ニ傳ハ
 リシハ蓋シ天文以降ノ事ナレト是ヨリ先キ既ニ

支那地方ヨリ傳ハリシ者アリト云フ而シテ
 今日我邦ニ在テハ化學上百般ノ利益即
 チ衛生農工高ノ事一ニ之カ理論ニ藉テ進
 歩スヘキ者枚擧ニ遑アラズ故ニ此學子ヲ修ム
 ルノ急務タル復言ヲ發タスシテ明カナリ今此
 一書ヲ撰メテ淺近ヲ主トシ學者ヲシテ化學ノ
 一斑ヲ知ラシメントス因テ此學ノ効用ト来
 由ヲ略述シ以テ卷首ニ辨ス

明治十三年八月於闡微館

中川漁二郎識



星洲平戶齋書



Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

訓蒙化學凡例

一 化學の書方今行ハルニ者皆完全ハ眼書ニ非
 サルハナシ然レハ概テ歐米ノ書ヲ翻譯セシ
 者ニシテ其說ク所未タ以テ本邦初學之士ニ
 適スル者トス可ラサルニ似タリ此書務メテ
 適切ヲ主トシ初學ヲシテ復テ隔靴沓洋ノ嘆
 ナカラシメントス但余ノ淺學恐ラカハ謬誤
 少ナカラス江湖ノ君子幸ニ之ヲ正セ
 一 實地ニ就テ事物ノ理ヲ證センカ為メ書中六
 十有餘ノ試驗ヲ載ス授業ノ師宜シク之ヲ試

言部
三
驗シテ生徒ニ示シ又平安為シ易キ者ヲ擇ヒ
生徒ヲシテ自ラ之ヲ試験セシムヘシ然ラサ
レハ其説ク所恐ラクハ了解シ易カラス試験
者ノ心得ニ至テハ舉テ附録ニ在リ就テ熟覽
スヘシ又教員ハ常ニ實物ノ標本ヲ生徒ニ示
シ其危険ナラサル者ハ之ヲ扱ハシムルモ可
ナリ且ツ附録ニ載スル問題ヲ舉ケ其進歩如
何ヲ試ムヘシ
一書中用アル所ノ文字二類アリ一ハ通常ノ文
字一ハ細字ナリ通常ノ文字ヲ以テ記セル者

ハ本書ノ主眼トモ云フヘク妄リニ教員ノ意
ヲ以テ加減ス可ラサル者トス其細字ヲ以テ
記セル者ハ教員カ其授業時期ノ長短等ニ由
リ取捨シ得ヘキ者トス蓋シ之ヲ取捨センニ
若シ其當ヲ得サル時ハ大ニ全書ヲ害スルコ
トナキニ非ス宜シク注意スヘシ

明治十三年八月

編者識

訓蒙化學目錄

○卷上

第一章

總論 總論 總論 總論

第二章

非金屬元素

酸素

第三章

水素類

第四章

水素化合物

第五章

窒素類

第六章

空氣

酸類、塩基、塩類、區別

アムモニア化合物

第六章 炭素

第七章 炭素ト酸素ノ化合物

第八章 塩素 塩酸

臭素 沃素 弗素

第九章 硫黄

硫酸 硫化水素

第十章 硅素 硼素 磷

磷化水素

砒素

○卷下

第十一章 金屬元素

ポッタシユム

炭酸「ポッタリス」 苛性「ポッタリス」

硝石 塩素酸「ポッタシユム」

塩化「ポッタシユム」

沃化「ポッタシユム」 霸王塩

第十二章 ソジユム

炭酸「ソーダ」 苛性「ソーダ」

第十三章

芒硝

カルシウム

炭酸石灰

石灰

石膏

磷酸石灰

ストロンチウム

バリウム

第十四章

アルミニウム

明礬 空青

マグネシウム

亜鉛

亜鉛花

皓礬

塩化亜鉛

第十五章

鉄

鉄山黄命

鉄ト酸素ノ化合物

鉄ト硫黄ノ化合物 緑礬

第十六章

マンガンニース

コバルト

ニッケル

クロム酸塩類

第十七章

錫

アンチモニー

蒼鉛

第十八章

鉛

鉛ト酸素ノ化合物

硝酸鉛 鉛糖 炭酸鉛

銅

銅卜酸素、化合物

膽礬 炭酸銅

第十九章 水銀

朱 赤降汞

水銀卜塩素、化合物

銀

硝酸銀 塩化銀

黃金

塩化黃金

白金

結尾

○附錄

問題 試驗者ノ心得

試驗用器械藥品及七教授用標本目錄

目錄畢

訓蒙化學卷上

丹波 中川謙二郎

編述



第一章 總論

薪柴、蠟燭若クハ油ノ類ニ火ヲ點スレハ漸ク燃
 尽キテ終ニ其形狀ヲ失ヒ鐵器日ヲ經レハ錆
 ヲ生シテ其色ト強カトヲ失ヒ或ハ又飲食物ノ
 腐敗シテ其味ヲ失フ等畢竟是レ何等故ノ若
 シ造化主宰ニ侍側シテ詳カニ物質變化ノ真理
 ヲ聽クコトヲ得ハ誰カ又隨ヒテ自餘數萬ノ疑ヒ
 ヲ質タサル者有ンヤ今此化學ハ實地ニ就キ

第二試驗 赤降汞即此銀外酸者少許ヲ取リ
 之ヲ試驗管ニ入レテ前ノ如ク酒精燈上ニ置クト
 キハ漸ク分レテ試管ノ頭ノ所ニ灰色ノ數小
 球ヲ附着セテ管口ヨリ無色ヲ發スヘシ灰色
 ノ小球ハ即チ水銀ニ氣ヲ發スヘシ即チ酸素
 ト稱スル元素ナリ此氣視ル可ク消スト雖モ試
 ニ附木ニ火ヲ點シ吹キテ其焰ヲ消シ尚ホ殘火
 アル者ヲ管内ニ入ルレハ再ヒ火焰ヲ發スハ
 是レ其酸素管内ニ有ルハ微ナリ此二物成ル
 ヲ以テ之ヲ合スレハ復タ初ノ赤降汞ト成ル
 此クノ如ク元素合シテ化合物ト成リ化合物分
 レテ元素ト成ルハ作用ヲ物質變化ト曰ヒ又化
 學作用ト曰フ化學ノ士能ク此變化ヲ起ス
 外自在ナレモ亦自然ニ起ル
 炭油等ノ燒盡ニ銅鐵ヲ鑄テ生シ飲食物等ノ腐敗スル

カ如キハ皆自然ノ作用ニ由ルモノナリ
 宇宙間ノ萬物ハ皆元素ト化合物ナルヲハ上文
 ニ在テ既ニ明了ナルヘシ抑モ元素ノ天地間ニ
 アルモノ其數幾許ナリヤ之ヲ考フルニ現今知
 ル所ノ者凡六十有餘中チニ三體アリ酸素ノ如
 キ氣體アリ水銀ノ如キ液體アリ硫黃銅鐵ノ如
 キ固體アリ而シテ固體最モ多シトス此元素ノ
 中或ハ多量ニ有リテ百工製造ノ材ニ有用ナル
 者アリ或ハ少量ニシテ其性質未タ詳カナラサ
 ル者アリ此書專ラ有用ノ元素ヲ説キテ自餘ノ

元素ヲ説カス簡易ヲ主トスルカ故ナリ
 元素ノ種類ヲ分チテ二属トス一ヲ金屬元素ト
 曰ヒ一ヲ非金屬元素ト曰フ金、銀、銅、鉄ノ類ヲ金
 属元素トシ酸素、硫黄ノ類ヲ非金属元素トス金
 属元素ハ其數總テ五十種アリ非金属元素ハ其
 數僅カニ十五種ノミ然レモ此別固ヨリ判然々
 ラス唯便利ヲ主トシテ設クルノミ今元素中有
 用ノ者ヲ取リテ左ニ掲ク
 非金属元素
 酸素
 水素
 窒素

炭素
 塩素
 臭素
 沃素
 弗素
 硫黄
 硅素
 硼素
 磷
 砒素
 金属元素
 ポッタシウム
 ソジウム
 カルシウム
 ストロンシウム
 バリウム
 アルミニウム
 マグネシウム
 亜鉛
 鉄
 マンガニース
 コバルト
 ニッケル
 クロミウム
 錫
 アンチモニー

蒼鉛

水銀

白金

銀 鉛

銅 黃金

以上諸元素其性質各異ナリト雖凡其中大ニ異ナルト否ラサルトノ差アリ硫黄ト鉄トハ其性質大ニ異ナレ凡錫ト鉛トハ稍相同シ而ルニ化合ノ力ハ其性質愈異ナレハ愈強ク愈同シケレハ愈弱シ是レ化學ノ士實驗シテ知ル所ナリ例ヘハ硫黄ト鉄トハ好シテ相化合シ硫化鉄ト稱スル一種ノ化合物ヲ生スレ凡錫ト鉛トハ化合

スルノ力甚ク弱キカ如クハ其性質大ニ異ナルル第二章 非金屬元素

前章掲クル元素ノ表ニ後七次ヲ追ヒテ元素ノ性質功用ヲ概論シ兼テ其化合物ニ論及スヘシ

酸素ハ透明無色無味無臭ノ氣體ニシテ視ル可ラスト雖凡大ニ之ヲ冷マシテ強ク壓スルキハ遂ニ液體ト成ル此物或ハ游離シ或ハ化合シテ天地ノ間ニ存スルコト極メテ多シ地球週遍ノ大氣ニ在テハ游離シテ其容量五分ノ一二居ル

即チ大氣ハ游離酸素ト其容量四倍ノ游離窒素ト相混合シテ成ル者ナリ又地殻ニ在テハ化合シテ重量半ニ居リ水ニ在テハ重量九分ノ八ニ居ル即チ地殻ハ許多ノ酸素化合物ヨリ成リ水ハ酸素ト水素トノ化合物ナリ又動植諸物中ニ化合シテ存スル者頗ル多シ
 酸素他ノ元素ト化合スルノ作用ヲ酸化ト謂ヒ其化合シテ成ル物ヲ酸化物ト謂フ凡ソ化合ノ作用ハ必ラス熱ヲ起ス者ニシテ萬物酸化スルキハ亦必ラス熱ヲ起シ熱極レハ光ヲ發ス此ノ

如ク熱ト光ヲ發シテ酸化スルヲ燃燒ト云フ燃燒トハ物ノ燃ユルヲ云フナリ又鉄器ハ錆ヲ生シ酒ノ酢ニ變スルカ如キモ亦皆酸化ニシテ唯其度ノ緩漫ナルノミ故ニ鉄錆ハ鉄ノ酸化物ニシテ酢モ亦酒ノ酸化物ナリ酸化ノ度是ノ如ク緩漫ナルキハ發熱著シカラスト雖凡其度太タ急迫ナルトキハ發熱最モ甚タシ薪柴蠟燭等ノ燃ユルハ酸化急迫ノ現象ナリ日常用フル木炭ハ炭素ナルヲ以テ之ヲ燃ヤセハ炭素ノ酸化物即チ炭酸ト稱スル氣體ニ變ス蠟燭油ノ如キハ

理、シ冬時暖ヲ取ルモ、亦皆蠟油薪炭ト氣中ハ酸、
 素トハ化合ニ賴ラサルハナシ蓋シ酸素ノ用獨
 リ此レノミニアラス人獸鳥魚等ハ諸動物片時
 モ之ヲ欬ク可ラス若シ之ヲ欬ケハ即チ死ス其
 用大ナルカナ

抑モ人獸鳥魚等ノ空氣ヲ呼吸シ以テ其生ヲ保
 ツヤ其吸入スル空氣中ノ酸素ト體中ノ炭素ト
 化合シテ炭酸ヲ生シ之ヲ呼出スルコト猶ホ木
 炭蠟燭ノ酸素ヲ引キテ燃エ以テ炭酸ヲ生スル
 カ如シ人身常ニ温熱有リテ全ク土石ト異ナル

モノハ實ニ之カ為メナリ蓋シ人獸鳥魚ノ呼吸
 ハ果シテ蠟燭ノ燃ユルカ如ク能ク空氣ノ狀ヲ
 變化スルヤ否ヤ左ノ試驗ヲ以テ之ヲ證明ス可
 シ

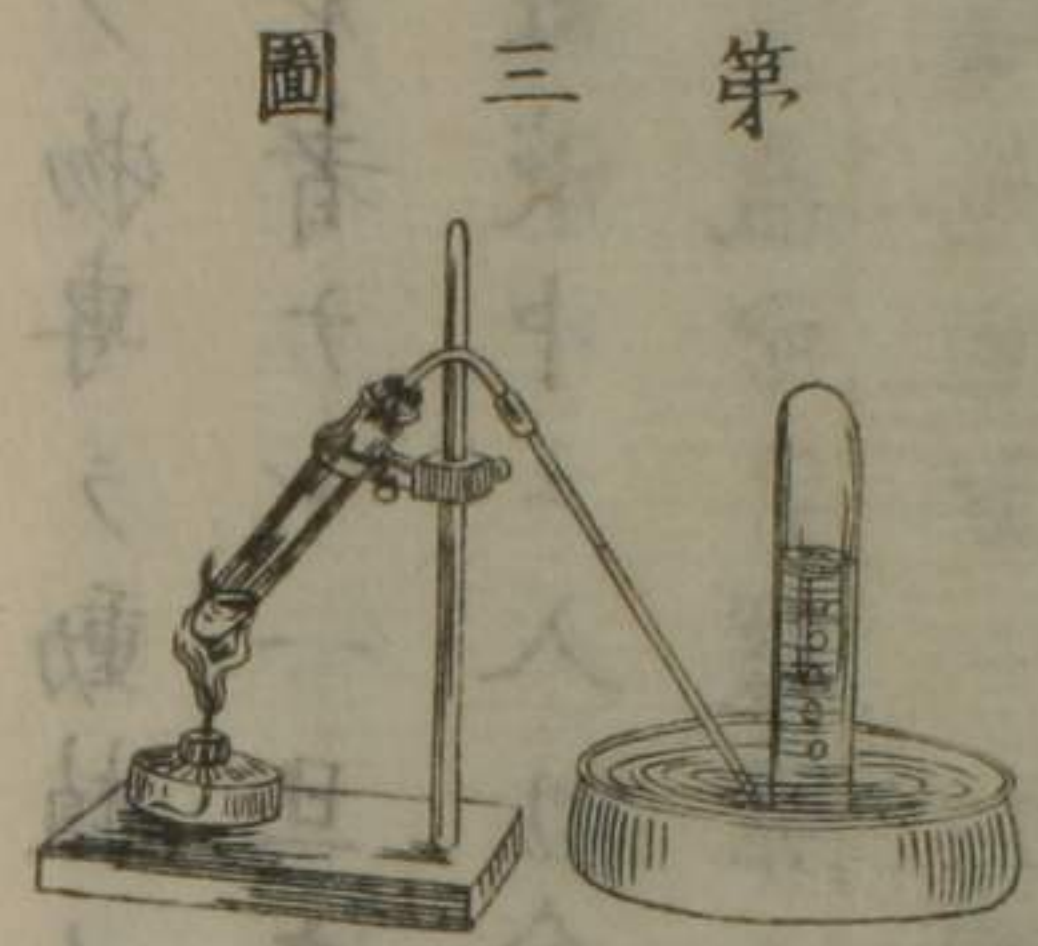
第五試驗 人身呼出ノ氣ハ吸入ノ氣ト異ナラ
 ス全ク同一ノ氣ナレハ其氣ヲ吸入ノ灰水中ニ吹
 入ルハモ亦タ些少ノ變化ヲ見サルハシ而ルニ
 透明ノ石灰水ヲ破璃盃ニ盛リ竹管ヲ以テ呼出
 ノ氣ヲ吹キ入ルハ其水忽チ濁リテ乳狀ヲ為
 ス是レ前ニ蠟燭ヲ燃ヤシタル濁リテ乳狀ト石
 水ヲ注キ白濁ヲ生シタル者ト同シ炭酸ト石
 灰ト化合ニ由テ生スル所ナリ是ニ由テ之ヲ
 觀レハ呼吸ノ氣ハ吸入ノ氣ト異ナルハ知
 テ炭酸ヲ含ミ人獸鳥魚ハ呼吸ニ由テ空氣ハ
 變スルコト猶ホ燭火ハ呼吸ニ由テ空氣ト異
 ルヘシ

今專ラ人身ニ就テ之ヲ言ハン上文試験ノ成績ニ由テ考フレハ人身ハ實ニ點火シタル蠟燭ノ如シ然レモ人身ノ體火ハ燭火ノ如ク熱甚タ高カラズ體亦燒滅セス此理何等ノ故ソ抑モ人々飲食スルコト毎日三回其志向一ナラスト雖モ半ハ體中ニ燃材ヲ供シテ體火ノ消滅ヲ防カンカ為ナリ人或ハ此理ヲ知ラス大ニ恠ムヘシト雖モ知ラス識ラス此理ニ合ナラ故ニ其飲食スルト恰モ時々燭臺ニ蠟燭ヲ供シテ其燃燒ヲ保續スルト一モ異ナルトナシ蓋シ人々食スル所

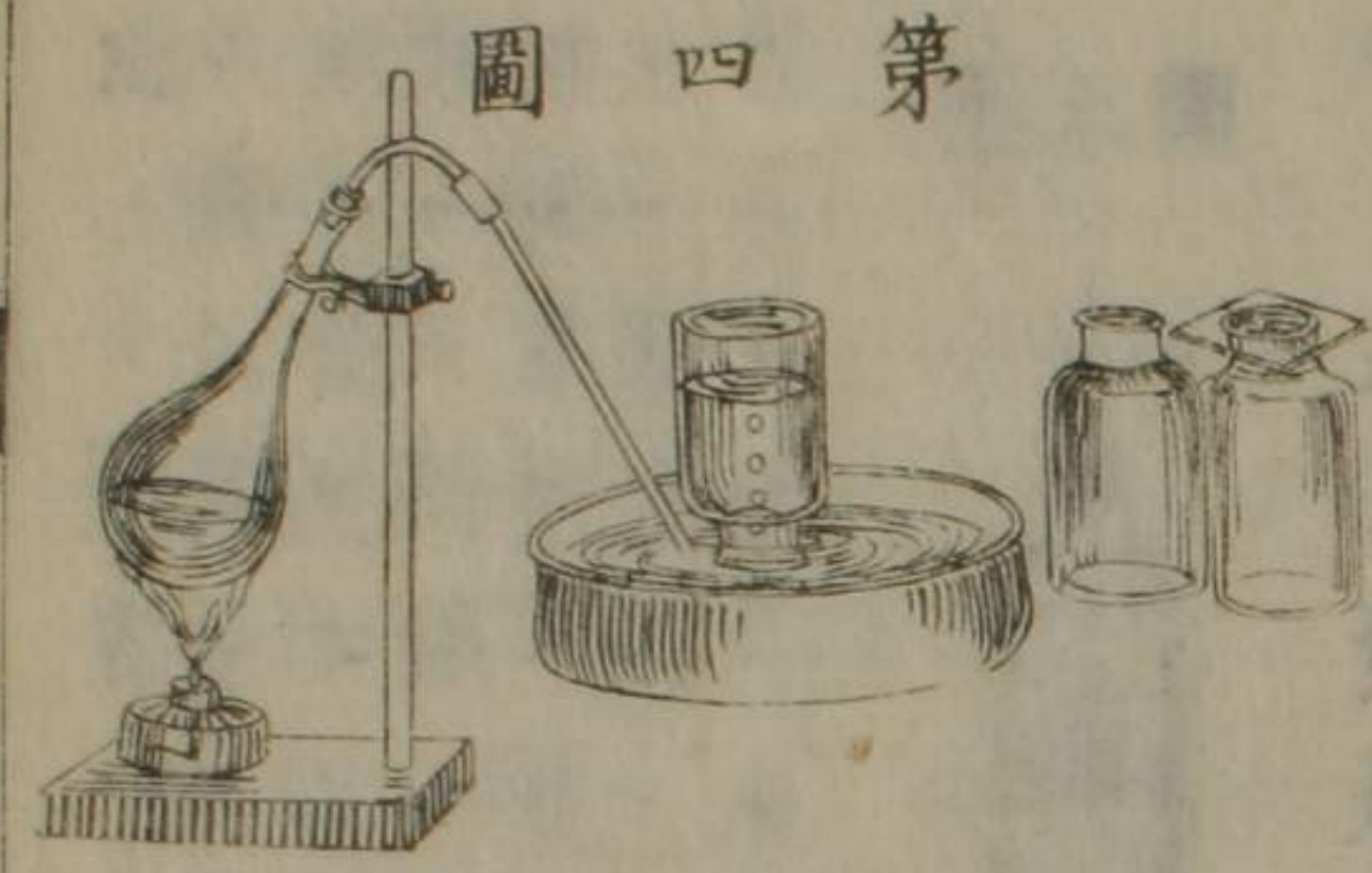
ノ物專ラ動植ノ二物ニシテ俱ニ炭素ヲ含マヤル者ナシ一旦之ヲ食スレハ生理作用ヲ受ケテ血液中ニ入り含ム所ノ炭素ト肺内ニ吸入スル空氣中ノ酸素ト化合シテ熱ヲ起スト雖モ此熱燭火ノ如ク一點細小ノ處ニ起ルニ非ス遍ク全體ノ血液中ニ起ルヲ以テ火焰ヲ發セサルノミナラス其度モ亦高カラズ若シ全體散布ノ熱ヲシテ一處ニ聚ムルト得ハ火焰ヲ發スルト必

然ナリ是ニ由テ之ヲ考フレハ蠟燭ハ燃ユルト人類動物ハ呼吸スルトハ其狀比ス可ラスト雖

氏其實ハ俱ニ炭素ハ酸化スル現象ニ外ナラズ
 酸素大氣中ニ在テハ窒素ト混シテ游離スト雖
 氏若シ純粹ノ酸素ヲ得ントセハ多ク酸素ヲ含
 ミテ熱ノ為ニ分解シ易キ化合物ヲ取り之ヲ熱
 スルキハ即チ得ヘシ左ニ二法アリ



第六試驗
 管塞子ヲ以テ玻管ヲ挿入シテ
 管ノ一端ヲ水ニ浸シテ水ヲ盛リ
 太キ口ヲ蓋ヒ水ニ盛リ大指
 テテ其口ヲ蓋ヒ水ニ盛リ大指
 シテ後テ酒精燈ヲ上ニ置キ
 熱スルハ酒管ノ上ニ置キ
 驗管中ニハ酸素ハ漸ク水ト交代ス



第七試驗
 乃テ純粹ノ酸素前法
 アヤ之ヲ試ミ管中ニ入ル
 否ヤ之ヲ試ミ管中ニ入ル
 管中ニ聚リタル氣體ハ實ニ純粋ノ酸素ヲ得
 氣ヲ混スリタルノ如ク但去テ最初ニ聚ルモ其試
 ルヲ第三圖ノ如ク之ヲ去テ最初ニ聚ルモ其試
 驗管中ニハ酒管ノ上ニ置キ熱スルハ酒管ノ上ニ置キ

ルヲ瓶ノ一端ヲ水ニ浸シテ水ヲ盛リ大指
 テ其管中ニハ酒管ノ上ニ置キ熱スルハ酒管ノ上ニ置キ
 第四圖ノ酸素ハ漸ク水ト交代ス
 如クボツクスレハ酒熱發
 色ヲ乾キタルガ細口ノ玻瓶ニ和シ
 タハ宜クテ他ノ試量ハ純粋ノ酸素ヲ取
 ハハ以テ他ノ試量ハ純粋ノ酸素ヲ取
 法ヲ以テ他ノ試量ハ純粋ノ酸素ヲ取
 徵ナリヘレ附木再ヒ燃ユレハ

「オゾー」通常ノ酸素ハ臭氣ナレト雖凡之ニ
 電火ヲ通スレハ其性頓ニ變シテ雷鳴ノ片感ス
 ル如キ一種ノ臭氣ヲ發シ且ツ其化合力大ニ強
 キヲ加ヘ通常酸素ノ得ヘカラサル作用ヲ為ス
 ニ至ル之ヲ「オゾー」ト謂フ是レ唯酸素ノ變體
 ニシテ化合物ニハ非ス此物或ハ電雷ノ為メニ
 生シ或ハ又松杉等細葉樹ノ為メニ生スルカ故
 空氣中多少之ヲ含マサルコト非サルヘシ其用
 大氣中有害ノ物ヲ化シテ無害ノ物トシ以テ病
 源ヲ剪滅シ大氣ヲ清淨ニス亦緊用ノ一物ナリ

第三章

水素

水素モ亦無色無味無臭ニシテ視ルヘカラサル
 ノ氣躰ナリ此物常ニ游離シテ存スルモノナレ
 ト雖凡化合シテ存スルモノ頗ル多シ即チ酸素
 ト合シテ水ヲ成シ又酸素炭素及ヒ窒素等ト合
 シテ動植物性諸物ヲ成シ又硫酸塩酸等ノ酸類中
 之ヲ含マサル者ナレ其質最モ輕ク萬物中第一
 ナリ之ヲ空氣ノ重サニ比スレハ僅ニ十四分ノ
 一ノミ
 水素ヲ取ルノ法一ナラスト雖凡基ツク所「ボク」

訓蒙化學

シユム、ソジユム、鉄等ノ金属及ヒ強熱ニタル木炭
ノ如キ酸化シ易キ物ヲ以テ尋常ノ水ヲ分解ス
ルニ在リ但シ「ポッタシユム、ソジユム」ノ如キハ水
ニ遇ヘハ直チニ之ヲ分解シテ酸素ヲ取り自ラ
酸化物ト為リテ水素ヲ放ツト雖モ鉄ノ如キハ
強ク火熱ヲ加フルニ非レハ能ハス然レモ水中
若シ硫酸等ノ酸類少許ヲ加フレハ熱ヲ要セス
シテ亞鉛モ鉄モ亦能ク之ヲ分解シ水素ヲ放ツ
ヘシ「水素」
第^十三^試驗^者平鉢ニ水ヲ盛リ「ポッタシユム」ハ此物水ヨ

リ輕キヲ以テ其形水面ニ浮ヒ焰ヲ揚ケ終ニ細々微
聲ヲ發シテ其中ノ酸素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
大ニ熱ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
中ニ赤色ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
花^ニ赤^色ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
變^シテ青色ト為ルニ細^ク赤^色ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
酸^化シテ青色ト為ルニ細^ク赤^色ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
第^十四^試驗^者上^ノ含^ムニ證^ナリ中^ニ「ポッタシユム」ハ此物水ヨ
得^ルニ試^驗者^ヲ含^ムニ證^ナリ中^ニ「ポッタシユム」ハ此物水ヨ
ス^多ク水^素ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
第^六圖^ノ如^ク水^素ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
入^レテ加^ヘテ水^素ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
管^ヲ備^ヘテ水^素ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
漏^斗管^ヲ備^ヘテ水^素ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
レ^テ水^素ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
猶^ホテ水^素ヲ發シ復タ水素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分
ヨ^リ發^出スル^所ノ水^素ハ再ヒ化合シ水素ヲ分

訓蒙化學

十三 圖說官裁

言
卷上

ヲ冷ヤレテ三十二度即チ水點ニ至レハ凝結シテ固
躰ノ水即チ水ト為リ熱シテ二百十二度即チ沸點ニ至
レハ沸騰シテ氣體ノ水即チ蒸氣ト為リ以テ固氣液
ノ三形ヲ成ス者ナリ
水ノ純粹ナルモノハ清淨透明無味無臭ナリト
雖氏其性能ク物ヲ溶カスヲ以テ純粹ノモノ自
然ニアルヲ見ス雨水井水海水等一モ他物ヲ雜
シヘサル者ナシ就中海水ハ塩ヲ含シ又類似ノ
雜物ヲ含ム者ト最モ多シ唯雨水ハ稍々純粹ノ
水ニ近シトス今雨水ハ由テ生スル所ヲ考フル

ニ沼澤河海ノ水熱ノ為メニ蒸氣ト為リ飛散シ
テ空中ニ在リト雖氏熱風ノ為メニ海水ヲ蒸發
スルヲ殊ニ多シトス但シ海水中含ム所ノ塩類
ハ共ニ蒸發セス蒸氣既ニ空中ニ飛散シ會々冷
氣ニ觸ルレハ結ヒテ微細ノ水珠即チ雲ト為リ空
中ニ浮遊シ水珠愈增大シテ竟ニ浮遊スルノ力
ナキニ至レハ沛然トシテ地上ニ降ル之ヲ雨ト
謂フ故ニ雨水ハ天工ノ蒸餾水後ニ蒸餾水ノコトト
稱スヘシ然レ氏氣中常ニ雜物アリ故ニ多少此
物ヲ帶フ唯塩類ヲ含ムト無キノミ

川
卷上
十六
國後宮藏

井水等ノ地中ヨリ湧キ出ツルモノハ元ト皆雨水等ノ地中ニ滲入シタル者ナレバ雨水ト其質ヲ異ニシテ常ニ多少ノ塩類ヲ帶フ試ニニ清淨ノ井水若シクハ河水一二合ヲ取り清潔ノ陶器中ニ入レ漸々煎シ去テ水分全ク蒸散スルニ至レハ必ス滓ヲ残スヲ以テ知ルヘシ是レ其地中ヲ通過スル片溶解シ易キ物質ヲ帶ヒ來タル由ル故ニ水中含ム所ノ物ハ其通過スル途中土石ノ種類ニ從ヒテ一定ナラスト雖氏概子大同小異ナリ其最モ多量ノ塩類ヲ含ム者之ヲ總稱

シテ鑛泉ト曰フ上野ノ草津伊豆ノ熱海及七攝津有馬ノ温泉等ハ是ナリ○凡ソ飲料ニ供スヘキ水ハ清澄ニシテ少量ノ塩類ヲ含ミ毫モ動植物性ノ不潔物ヲ含マサル者ヲ撰ムヘシ然ルニ都會ノ流水ハ勿論井水モ亦此不潔物ヲ含ム者少カラス故ニ此ノ如キ地ニ在テハ深ク注意シテ飲水ヲ撰フヘシ然ラサレハ病ヲ得ルノ原因ト為リ遂ニコレヲノ如キ劇病ノ害ヲ被ムルコトアリ飲水ノ試験忽ニス可ラサルハ之カ為メナリ

又海水ハ塩類ヲ含ムコト多キヲ以テ味鹹ナル
 ハ人ノ知ル所ナリ其源陸地ノ流水ニ在リ流水
 ハ元ト地中ヨリ出ツル所ナリ然ラハ則チ海水
 蒸發シテ雨水ト為リ雨水地中ニ滲入シテ復タ
 湧出シ流レテ海中ニ入り再ヒ蒸發シテ雨水ト
 為リ循環シテ止マサルモノ之ヲ水ノ循環ト云
 フ
 水能ク物ヲ溶カスノ性アリト雖凡物ニ從テ各
 差アリ砂糖、明礬、塩ノ如キハ甚タ溶解シ易ク石
 膏ノ如キハ僅カニ溶解シ砂ノ如キハ全ク溶解

セス氣體ニ至テハ多少ノ差アリト雖凡要スル
 ニ皆水ニ溶ケサル者ナシ水中溶解ノ空氣ハ魚
 類存活ノ係ル所尤モ缺ク可ラサル者ナリ蓋シ
 鱗介諸族ノ酸素ヲ要スルハ吾人ノ生活ニ之ヲ
 要スルト異ナルヲナキヲ以テナリ○明礬若ク
 ハ膽礬等ヲ熱湯ニ溶カシ之ヲ放冷スレハ結テ
 固體ノ數塊ト成ル取テ之ヲ觀ルニ其形皆同シ
 クシテ唯大小ノ差アルノミ此ノ如キ體ヲ總テ
 結晶物ト云フ
 第十七試驗 明礬十匁許ヲ取り之ヲ磁器或ハ
 玻璃器ニ入レ熱湯十匁許ヲ加ヘ攪和シテ溶解

之ヲ放冷スレハ八面無色ノ結晶ヲ成ス又膽
 礬ヲ以テ同シク之ヲ試ムレハ形状全ク明礬ト
 異ナル青色ノ結晶ヲ成サシ今此二物ヲ混シテ
 熱湯ニ溶カシ放冷シテ結晶ヒレハ明礬ノ
 無色結晶ト膽礬ノ青色結晶ト相並ヒテ生スヘ
 シ此レ乃チ混合シタル化合物ヲ結晶モ亦此ノ如
 分ツレ法ナリ水晶等自然ノ結晶モ亦此ノ如シ
 蓋シ造化ノ妙用ナリ
 又水ニ硬ト軟ト別アリ上ニ言ヘルカ如ク水
 ノ種類一ナラスト雖モ雨水ヲ除クノ外ハ多少
 ノ塩類ヲ含マサル者ナシ塩類ヲ含ム者ハ概子
 硬水ニシテ含マサル者ハ軟水ナリ軟水ハ容易
 ニ石鹼ヲ溶解シテ泡ヲ生シ凝固スルコトナク硬
 水ハ泡ヲ生セスシテ凝固シ易シ然ルニ純粹ノ

水ハ勿論石灰ノ類ヲ含マサル者ハ之ヲ溶解ス
 ルコト最モ易シト雖凡之ヲ含ム者ハ能ク石鹼
 ヲ凝固スヘシ是レ石灰ノ類ト石鹼中ノ酸類ト
 化合シテ不溶解物ヲ成セハナリ故ニ用フル所
 ノ石鹼ハ無用ニ屬シテ唯ニ石灰ノ類ヲ凝固セ
 シムルニ過キス猶ホ過量ノ石鹼ヲ用フルニ非
 レハ其水ヲ衣服浣洗等ノ用ニ供ス可ラス而ル
 ニ洗濯ヲ業トスル者モ未タ水ノ硬軟ヲ顧サル
 モノアリ嘆スヘキ哉又硬水ヲ以テ蒸氣ノ釜中
 ニ用フレハ不測ノ害ニ遭フコト往々之アリ故

水ヲ加テ降ルハ水中ノ炭酸モ亦初相化シ水ニ溶ケ
 タル炭酸ハ多量ノ硬水ニテ容易ク軟水ニ變
 セシムルコト多ク其水一因ニテ容易ク軟水ニ
 沸ノ内ムル炭垢ノ附ク散ル時ニ云フ鉄瓶ニ煮
 附キテ皮ト為ル由リ炭酸ガ硬シムルニシテ
 第十ニ試驗ト為ル時ニ硬ハ石膏ニシテ
 類ヲ含ム者ナリ永ニ試シテ少ク至テ其中ニ
 水盛リ置シテ清澄スルハ初テ濁シ生シ少ク
 ニシテ泡ヲ生スルコトナク沸シ再ヒ徴ヲ呈ス
 以後チ其石膏溶ルニ依テ炭酸ノ硬シムルガ
 シ更ニ変化シケルニシテ炭酸ノ硬シムルガ
 ハ石膏分テシテ炭酸ノ硬シムルガ
 ルニ及テ其水變シテ軟水ト成ル

純粹ノ水ヲ得ント欲セハ井水或ハ河水ヲ汲
 之ヲ蒸餾スヘシ蒸餾トハ水ヲ煮テ蒸氣ト為シ
 之ヲ冷ヤシテ復タ水ト成スヲ云フナリ其器一
 ナラスト雖モ試驗ノ為メニ少量ノ純水ヲ得ン
 ニハ第九圖ノ如キ本邦從來ノ蒸餾器ヲ以テ足
 レリトス

第二十試驗 水

第九圖



器ノ蒸餾セシムル水ヲ欲セハ先ツ蒸餾
 分目ニシテ火ニ上ル瓊ト以テ
 テ蓋ヒシテ冷水ヲ盛ルハ沸騰ス
 ノ如ク蒸氣ト為リ瓊ニ上ル其頂
 テノ冷水ニ為リ瓊ニ上ル其頂
 ノ液ヲ凝ル水ト為リ瓊ニ上ル其頂

下ス是レ即チ蒸餾水ナリ但シ初メ蒸餾シテ受
 器(ホ)ニ聚ル水ヲ以テ受器ヲ洗淨シ更ニ聚餾ヘカ
 ラス故ニ此水ヲ以テ受器ヲ洗淨シ更ニ聚餾ヘカ
 蒸餾ノ水ニ雜シム所ノ鹽類ハ皆釜中ニ殘リテ
 フ試ミシトセハ雜シム所ノ鹽類ハ皆釜中ニ殘リテ
 リ一ハ釜中ノ水ヲ以テ之ヲ洗淨シ或ハ玻璃盃ヲ取
 リ一ハ釜中ノ水ヲ以テ之ヲ洗淨シ或ハ玻璃盃ヲ取
 フ兩釜中ニ加フル盛リ後チ硝酸銀溶液ニ滴
 雖氏釜中ノ水ハ忽チ白濁ヲ生シテ觀レハ凡ソ物
 徴ヲ顯ハスヘシ是レ由テ之ヲ觀レハ凡ソ物
 極微ニシテ眼力及ハサル者ト雖氏化學ノ士
 之ヲ試ムレハ能ク其性質ヲ詳カニシ能ク其物
 體ヲ明カニスルコトヲ得ヘシ
 凡ソ水中含ム所ノ物ハ蒸餾スルニアラサレハ
 之ヲ去ルコト能ハスト雖氏泥土塵埃等ノ浮游
 物ハ之ヲ漉セハ乃チ去ルコトヲ得ヘシ河水井

水ノ最モ清キモノト雖氏之ヲ放置スレハ其垢
 滓ノ沉ムヲ以テ之ヲ知ルカ如ク水中多少ノ浮
 遊物ヲ含マサル者幾シト罕ナリ我邦ニテ通常
 水ヲ漉スノ法ハ砂漉ト稱スル所ニシテ桶内ニ
 砂ヲ盛リ水ヲシテ之ヲ通過セシムルニ過キス
 若シ其桶内上下ヲ砂ト為シ中間多量ノ木炭末
 ヲ入ルレハ更ニ一層ノ清水ヲ得ヘシ是レ木炭
 末ハ能ク浮游物ヲ留ムルノミナラス又能ク有
 害ノ物ヲ變シテ無害ノ物ト成スノ効アルヲ以
 テナリ

水ノ物タル功用甚々廣シ動物賴テ以テ生活シ
植物資テ以テ生長シ農工為メニ功ヲ得商賈為
メニ利ヲ得一々枚舉スルニ遑アラス

第五章 窒素

窒素モ亦酸素、水素ノ如ク色、臭味ナキ氣體ナレ
凡其性ニ物ト異ニシテ自燃及ヒ助燃ノ性ナク
動物ノ生活ヲ維持スルノ性ナシ故ニ動物此氣
中ニ在レハ即チ死ス然レ凡此物固ト毒性アリ
テ然ルニ非ス唯酸素ナキヲ以テ呼吸窒塞ヲ致
スノニ元來窒素ハ其性鈍クシテ容易ニ他物ト

化合セス常ニ空氣中ニ游離シテ其容量五分ノ
四ヲ成シ又化合シテ動植ニ物ノ體中及ヒ硝石
等ノ礦物中ニ存ス凡ソ鳥獸、魚族ノ肉及ヒ牛乳、
鶏卵、味噌、醬油等ノ人體ヲ營養スルノ功アルハ
皆其中窒素ヲ含ムノ故ナリ蓋シ人身各處盡ト
ク窒素ヲ含マサル處ナキハ亦皆其食物ヨリ資
ル所ナリ
窒素ヲ取ルノ法最モ簡便ナルモノハ鉄、銅或ハ
燐ヲ以テ空氣中ヨリ酸素ヲ排除シテ窒素ヲ殘
留セシムルニ在リ燐ヲ以テ酸素ヲ排除スルノ

法左ノ如シ

第二十一試驗 浮ヘ第十一試驗 大サ豆粒ノ一試 内ニ入レ熱シタキ 直チニ玻璃鐘ヲ以テハテ覆コト第十圖取ルヤ否

第十圖



即チ酸素ヲ失ヒ其内ノ空ハ燐ヲ燃ユルニ至リ水試ニ非ス若シ之ヲ疑ヒ其實ニ然ルヤ否ヤ内ノ空ハ燐ヲ燃ユルニ至リ水試ニ非ス若シ之ヲ疑ヒ其實ニ然ルヤ否

如ク其内ニ燭火ヲ下セハ忽チ息滅スルヲ以テ空素ハ焚燒ノ性ナク又空氣ハ酸素一容ト窒素四容トノ混合ヨリ成ルコトヲ證スヘシ

地球周圍ノ氣ヲ空氣ト曰ヒ又大氣ト曰フ人常ニ言フ竹ハ中心空虚ナリト又罇中酒無キヲ空罇ト曰ヒ屋裡人無キヲ空屋ト曰フ又曰ク空地空中ト凡ソ世人ノ空ト稱スル者ハ皆真ニ空ナルニアラス實ハ此大氣アリテ充滿ス故ニ吾人ノ生活スル處モ亦空ナルニアラス實ニ大氣海ノ下底ナリ而ルニ人々空氣ノアルヲ見サルモ

ノハ抑モ何ノ故ソ曰ク空氣ハ見ル可ラスト雖
凡速カニ手ヲ動カシ速カニ走ル時ハ軟々物ノ
觸ル、ヲ覺ユ又自ラ動カサルモ風ノ吹クヲ覺
ユルハ即チ空氣ニ觸ル、ノ感覺ナリ讀者空氣
ニ就キテハ上文數個ノ試験ニ由テ既ニ了解セ
レ所ナラン蓋シ空氣流動シテ草木ヲ搖カシ其
烈シキモノハ家屋ヲ倒シ船舶ヲ覆ヘスニ至ル
之ヲ名ツケテ風ト曰フ故ニ知ルヘシ風ハ唯空
氣ハ流動ナルト昔時泰西諸國未タ空氣ノ真
質ヲ詳ニセス故ニ之ヲ以テ亦元素ノ一トス今

ヨリ百年前ニ至テ始メテ其非ヲ發明セリ細カ
ニ之ヲ檢スルニ空氣ハ實ニ一個ノ元素ニ非ス
又一ノ化合物ニモ非ス數種ハ氣體相混和シテ
成ル即チ酸素、窒素ノ二元素ヲ主トシ炭酸、水蒸
氣、アムモニア等ノ混和物ナリ此等ノ物空氣中
ニ在テ各為ス所アリ窒素ノ如キ鈍性ノ物モ酸
素ト交ハリテ其烈性ヲ調和シ動物ノ生活ニ便
スルコト猶ホ淡水ノ酸味、苦味等ノ峻烈ナルモ
ノヲ調和スルカ如シ功用淺少ナラス
今動物ト植物ノ空氣中ニ於ケル作用ヲ對照シ

テ二物生存上ノ關係ヲ論スヘシ第二章ニ説ケルカ如ク動物ノ空氣ヲ呼吸シテ其生ヲ保ツハ其酸素ヲ吸テ身内ノ炭素ヲ燃ヤシ為メニ生スル所ノ炭酸ヲ吐クニ由ル人或ハ疑フ果シテ此ノ如クナレハ空氣中ノ酸素ハ終ニ全ク變化シテ炭酸ノミトナリ動物復タ能ク其生ヲ保タサルニ至ルヘシト此レ一ヲ知テ未タ其二ヲ知ラサル者ナリ植物其炭酸ヲ吸入シ日光ノ力ヲ藉テ之ヲ分解シ其炭素ヲ取テ木質果實莖葉等ノ形體ヲ成シ反テ酸素ヲ放出ス故ニ動物ハ酸素

ヲ吸入シテ炭酸ヲ呼出シ植物ハ炭酸ヲ吸入シテ酸素ヲ呼出シ有用無用互ニ相交換シテ生存ヲ為ス亦造化ノ妙用ナリ細カニ之ヲ説ケハ動物呼出ノ炭酸ハ植物葉ヲ以テ吸入シ其炭素ヲ取テ體質ト為シ其酸素ヲ放出シ以テ動物ノ需ニ供フ動物之ヲ取テ炭酸ト為ス蓋シ其炭素何レノ處ヨリ得ル讀者宜シク一考スヘシ二物斯クノ如ク重要ノ變化ヲ生シテ常ニ息ムコトナク相助ケテ其生ヲ全ウスル之ヲ動植生活ノ平均ト謂フ

白薯ヲ以テ之ヲ試ムヘシ又硝酸ハ能ク銀銅鉄等數多ノ金屬ヲ溶解シテ漸ク其功用ハ少ナキニ至ルヲ以テ文酸化少許ヲ試ハシテ漸ク用ハル者多キニ至ル試ミニ硝酸ハ一二片ノ小銅屑ヲ投入スレハ赤煙ヲ發揚シ銅ハ溶解シテ青色ノ液ト全ク異ナシ是レ硝酸ト稱スル別種ノ物ニ生シテ生シタルハ皆是ル硝酸銅ト稱スル別種ノ酸類ニ溶解スルハ皆是ノ如ク別種ノ酸物等ノ酸モトス

アムモニア一名 礮砂精

アムモニアハ窒素ト水素ノ化合物ニシテ劇シキ臭アル無色ノ氣味ナリ尿尿及ヒ其他水素窒素ヲ含有セル動植物腐敗スレハ必ラス此物ヲ發生ス是ヲ以テ空氣中常ニ少量ノアムモ

ニアアリテ大ニ植物ノ成長ヲ助ク蓋シ吾人ノ食品中全ク窒素ヲ含マサレハ身體ヲ滋養スル功ナキカ如ク植物ノ食品即チ肥料モ窒素ヲ含ミ分解シテアムモニアヲ生スヘキ者ニ非サレハ植物ヲ成長セシムルコト能ハス干鰯干鮠尿尿等ヲ貴重ノ肥料トスルハ畢竟其中ニアムモニ

アヲ生スヘキ窒素等ヲ含ムカ故ナリ
 第二十四試驗 礮砂即チ塩化ア少許ヲ粉末トシテ試管ニ入レ石灰末少許ヲ混シ酒精燈上ニ置キ少シク熱スレハアムモニア發生シテ一種ノ臭氣ヲ放ツベシ是レ礮砂内ノアムモニア潤シタル赤色試驗紙ヲ管中ニ挿入スレハ變シ

テ青色トナル又小玻璃片ヲ硝酸或ハ塩酸ニ浸
 タレ管口ニ近ツクレハ白煙ヲ生スルヲ見ルハ
 シ是レ「アムモニア」ト其酸ト化合シテ別種ノ物
 ヲ生シタルナリ
 「アムモニア」ハ能ク水ニ溶クルノ性アリ醫藥其
 他種々ノ用ニ供スル「アムモニア」水ト稱スル者
 ハ即チ「アムモニア」ヲ水ニ溶解シタル者ナリ

酸類 塩基 塩類

上文ノ如ク硝酸ト「アムモニア」トハ試験紙ヲ變
 色スルコト全ク相反シ硝酸ハ青色ヲ變シテ赤
 色トシ「アムモニア」ハ赤色ヲ變シテ青色トス硝
 酸ノ如ク酸味ヲ具ヘ青色試験紙ヲ赤色ニ變ス

ル者ヲ總テ酸類ト曰ヒ「アムモニア」ノ如ク赤色
 試験紙ヲ青色ニ變スル者ヲ總テ塩基ト曰フ酸
 類ト塩基トハ好テ互ヒニ相化合シ酸類ニモ非
 ス又塩基ニモ非ス全ク一種中性ノ者ヲ生ス總
 テ之ヲ塩類ト曰フ

「アムモニア」ト酸類トノ化合物

今「アムモニア」ト酸類ト化合シタル物即チ「アム
 モニア」塩類ノ一二ヲ説カン
 礮砂一名塩化「アムモニウム」 右「アムモニア」ノ
 試験ノ時塩酸ト「アムモニア」ト相觸レ生スル所

ノ相形ヲ具フト雖其本質ニ至テハ皆同一ノ炭素ニ外ナラス何ヲ以テカ之ヲ知ル試ニ此三種ノ純粹ナル者同量ヲ取り別ニ酸素中ニ燃マセハ燃盡シテ各同量ノ炭酸ヲ生スルニ由ルナリ蓋シ炭素ハ酸素水素等ノ物ト化合シテ動植物ヲ成シ且ツ空氣中ノ炭酸及ヒ石灰石大理石等ノ礦物モ皆炭素ノ化合物ナリトス抑モ炭素動植物ノ生存ニ關スルヤ其用最モ大ナリ若シ此世界ヲシテ此元素ナカラシムレハ其景况果シテ如何ソヤ動植物一モ成立スル

コト能クサルヤ必セリ凡ソ動植物ノ諸體即チ諸有機物ハ炭素ヲ含マサル者ナキノニナラス實ニ此元素ハ動植物生存ノ基本ニシテ前ニ第四章空氣ノ條ニ於テ言ハルカ如ク動物ハ酸素ヲ吸入シテ炭酸ヲ呼出シ植物ハ炭酸ヲ吸入シ炭素ヲ攝取シテ酸素ヲ遊離セシムレハナリ夫レ動物ハ酸素ヲ吸入シテ體內ノ炭素ヲ燃ヤシ炭酸ヲ呼出シテ息ムコトナシ而シテ體內ノ炭素ハ元ト何レノ處ヨリ得タル食物是レナリ食物皆悉ク此炭素ヲ具フル者ニシテ或ハ植物性ノ

物アリ或ハ動物性ノ物アリ植物性ノ物トハ米、
 麥、蔬菜、味噌、醬油ノ類ヲ云ヒ動物性ノ物トハ禽
 獸、魚、介ノ類ヲ云フ而ルニ其動物タル多クハ植
 物ヲ食シテ成長シタル者ナレハ體內ハ炭素ハ
 皆之ヲ植物ヨリ得タリト謂フハ然ラハ則チ
 其炭素ハ植物ノ體ヨリ動物ノ體ニ移リ又動物
 ノ體ヨリ空氣ノ中ニ出テ更ニ植物ノ體ニ歸ス
 ルカ如ク動植物ノ間ニ往來シテ循環息マサ
 ル者ナリ又竹木ノ如ク動物ノ體中ニ入ラサル
 植物ハ焚燒ニ因テ遠カニ分合シ其炭素ヲ炭酸

ト為シテ空氣ノ中ニ放散シ或ハ腐敗ニ因テ徐
 々ニ分合シ其炭素ヲ炭酸ト為シテ空氣ノ中ニ
 放散スレハ復タ植物ノ吸入スル所ト為ル此ノ
 如ク炭素ハ動植物、空氣ノ三物間ヲ遊周スルヲ以
 テ之ヲ炭素ノ循環ト名ツク實ニ此妙機ニ由テ
 生物世界ノ成立ヲ致ス者ナリ必竟此一元素ニ
 シテ其功用此ノ如キハ亦驚クヘキニ非スヤ
 上文說ケルカ如ク凡ソ一切ノ動植物及ヒ之ヨリ
 成出スル所ノ諸物例ハ肉、絹、木綿、砂皆炭素
 ノ化合物ヨリ成ル者ニシテ其類甚ナカラスト

雖氏過半ハ炭素ト酸、水、窒ノ三元素トノ化合ス
ル者ニシテ化學上ノ組織亦極メテ繁雜ナリト
謂フヘシ故ニ此諸體ニ就テ講究スルヲ化學中
ノ一大科目トス之ヲ有機體化學ト曰ヒ又炭素
化。合。體。化。學。ト曰フ其中專ラ人體ニ關スル者ヲ
人。體。生。理。化。學。ト曰ヒ動物ニ關スル者ヲ動物化
學ト曰ヒ植物ニ關スル者ヲ植物化學ト曰フ各
化學ノ一科ナリ故ニ之ヲ講明スルハ太夕緊用
ニ屬スト雖氏此書ノ能ク記載スヘキ所ニ非サ
ルナリ

游離炭素ノ一種ナル炭類ノ用ヲ掲クレハ石炭
ノ如キ貴重ノ燃料アリ又木炭ノ如キハ燃料ト
為スノミナラス物ヲ吸収スルノ性アルニ由リ
或ハ色ヲ褪シ或ハ動植物ノ毒物ヲ分解シテ其
毒性ヲ滅スルノ功用アリ但シ此吸収性ハ獸炭
即チ骨ノ如キ動物性ノニ著シキヲ以テ西洋諸
國砂糖ヲ潔白ニ為シ或ハ惡水ヲ澆スニ多クハ
此物ヲ用フ又炭類中最モ純粹ナル烟煤等ノ類
ハ漆工及ヒ墨工ニ要用ニシテ墨ハ即チ膠ヲ以
テ烟煤ヲ凝固セシメタル者ナリ

石炭 石炭ハ太々有功ノ者ナリ此物地中ヨリ
 出テ炭類中最モ純粹ナラサル者ニシテ太古地
 上ニ生長シタル植物故アリテ深ク地中ニ埋没
 シ漸ク變化シ終ニ無數ノ年月ヲ經テ生シタル
 者ナリ石炭坑内ニ入レハ往々草茎木葉等ノ痕
 跡ヲ見且ツ石炭中木理ヲ存スル者多キニ由テ
 之ヲ知ルヘシ此レ天地自然ノ變化ニシテ人ノ
 木ヲ燒テ木炭ト為スト其理相異ナルトナシ唯
 木炭ハ急遽ノ變化ニ由テ生シ石炭ハ徐々ノ變
 化ニ由テ生シタルノ差アルノミ故ニ石炭ハ天

工ヲ以テ徐々ニ製スル所ハ木炭ニシテ其變化
 未タ全カラズ今猶ホ其窠中ニ在ル者ト謂ハヘ
 シ即チ石炭ハ未タ全ク燒ケサル木炭ノ如クニ
 シテ炭素ノ外更ニ水、酸、窒ノ三元素ヲ含ムモノ
 ナリ
 石炭ノ要用ナル之ヲ貴重ノ燃料ト為シ蒸氣船、
 蒸氣車及ヒ諸般ノ蒸氣機等ニ用ヒ其他開明ノ
 諸國ニ於テハ製造工作ニ用フルコト頗ル多シ
 将来百般ノ事業其ノ盛否ヲ考フルニ實ニ石炭
 ノ有無ヲ以テトスヘキ者ノ如シ加之石炭ヲ蒸

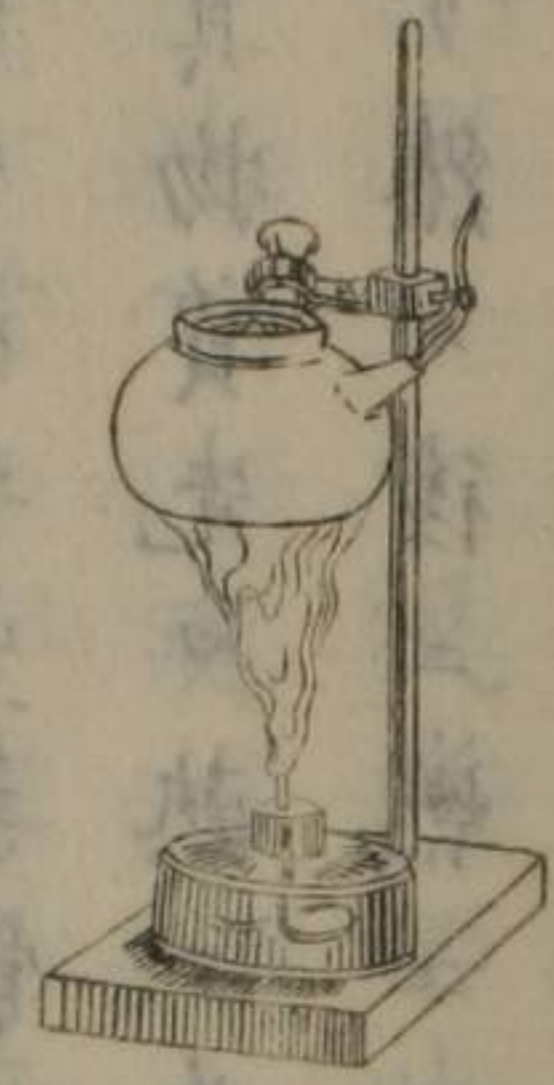
言蒙
イ
考
此

附
後
食
藥
料

燒スレハ多量ノ氣體ヲ發生ス之ヲ石炭瓦斯ト云フ此氣取モ燃エ易ク今時瓦斯燈ト稱スルモノハ即チ之ヲ燃ヤシテ燭火ニ代フルモノナリ
簡易ナル試験ヲ左ニ舉ケ以テ瓦斯製造ノ理ヲ

證明スヘシ
第二十五試驗
石炭少許ヲ細末トシ且ニ常濕燻テノ
以テ急須ノ如キモノノ間隙ヲ塞キテ能ク乾カテ後
ハ其口ヨリ煙ノ如ク酒精燈ヲ發シ以テ急須ヲ熱スレ
ハ焰ヲ揚ケテ燃ユ是レ即チ用上ニ言フ石炭瓦斯
ナリ今又前ニ酸素ノ試驗ニ用ヒタル者ヲ玻璃管或
ハ竹管ノ一端ニ護管ニ挿シ管ノ着キタル中ニ
須ノ口ヲ聚ムルカニ如ク水ヲ管ノ端ニ注ル
水素ヲ聚ムルカニ如ク水ヲ管ノ端ニ注ル

第二十圖



讀者此炭素ト水素ノ化合者ハ燃ヤル炭素ト水素ト
灰水ト玻璃盃ト取リテ其炭瓦スヤ酸ト燃ヤル石
スルコトヲ用ヒテ輕氣球ニ充テハ空ヲ試シ終
キヲ後チ急須ニ殘ル粉所ノ炭充テハ深キ者ト
殘ル毒藥ナル紅粉紫粉等ノ美麗ナル溶含スレト
深病消毒藥ナル石炭酸等ヲ製出スルハ其化
又其水中ニ賣買スルアムアムモアムモ
チ藥舖ノ賣買スルアムアムモアムモ

川
蒙
化
學

卷
上

三十五

關
敬
官
成
萃

ノ源ナリ唯是レ一個ノ石炭ニシテ其出ス所此
ノ如シ化学ノ功大ナルカナ
焰 吾人常ニ薪、蠟、油ノ焰ヲ見ルノミナラス又
水素ノ焰ヲ見又酒精ノ焰ヲ見今又石炭瓦斯ノ
焰ヲ見ル凡ソ焰ト稱スル者ハ燃ユル所ハ氣體
ニ外ナラス石炭瓦斯及ヒ水素ノ焰ハ實ニ其然
ルコト明カニシテ論ヲ待タスト雖ヒ酒精、油、蠟、
薪ニ至テハ平生氣體ニ非サルモ焰ヲ發スルノ
理ハ其物質先ツ熱ノ為ニ分解シテ種々ノ氣體
ト為リ然ル後ニ燃ユル者ニシテ石炭ヲ熱シテ
瓦斯ヲ生セシメ之ヲ燃ヤスニ異ナラサルナリ

即チ蠟ト油トニ就キテ言ハン蠟ト油ハ熱ノ為
メニ分解シテ瓦斯ヲ生スヘキ者ナリ燭心ハ此
瓦斯ヲ生スル處ニシテ此瓦斯ハ直チニ燭心上
ニ燃ユル者ナリ故ニ前ノ試驗即チ第五試驗ニ於テ
石炭ニ代フルニ酒精、油、蠟、薪ヲ以テスルモ亦瓦
斯ヲ得ヘキナリ是ヲ以テ木炭ノ如ク燃ユルノ
前、氣體ニ變セサル者ハ決シテ焰ヲ發セサルヲ
見テモ焰ノ氣體ナルヲ察スヘシ又各種ノ焰
ヲ比スルニ或ハ水素、酒精ノ焰ノ如ク光明太タ
弱キ者アリ或ハ油、蠟及ヒ石炭瓦斯ノ焰ノ如ク

ハ安全ナリ燭火滅ユレハ危険ナリ入ル可ラス
 炭酸ハ水ニ溶解スルノ性アルヲ以テ各種ノ水
 多少之ヲ溶含セサル者ナレ其中自然ニ多量ノ
 炭酸ヲ溶含スル水ヲ炭酸泉ト稱ス山城國相樂
 郡ニ産スル炭酸泉ハ即チ其一ナリ「ラム子」水
 「ダ」水或ハ麥酒瓶ノ塞子ヲ去レハ急ニ沸騰ス
 ルモ亦其中ニ溶解シタル炭酸ノ逃レ出ルニ由
 ルナリ何ヲ以テ炭酸其中ニ在ラスレテ逃レ出
 ツルヤ蓋シ氣體ノ水ニ溶解スル分量ハ壓力ノ
 多少ニ由ル故ニ愈壓スレハ愈増ス者ナリ炭酸

モ亦麥酒等ノ瓶中ニ在ル片ハ強ク壓セラレ、
 ヲ以テ為ニ溶解スルコト頗ル多シ是ヲ以テ塞
 子ヲ去レハ壓力俄ニ減スルニ由リ即時ニ逃レ
 出ツル者ナリ人或ハ思フ炭酸ハ呼吸ニ害アル
 ヲ以テ酒水等ノ物之ヲ含ムモ亦害アリト是即
 チ然ラス炭酸ハ呼吸機即チ肺ニ害アリト雖モ消
 化機即チ胃ニ害ナキハ此ナラス反テ藥効アリ
 一酸化炭素
 一酸化炭素ハ空氣ノ流通充分ナラサル處ニ於
 テ炭類ヲ燃ヤス片生スル所ノ無色氣體ニシテ

其性劇毒ナリ人若シ此氣ヲ吸入スレハ立コロ
 ニ斃ル炭窯木ヲ燒テ木炭トスル窯或ハ石灰窯石灰石ヲ燒
 窯ノ邊ニ於テ往々人命ヲ害フコトアリ是レ其
 窯ヨリ發スル氣中ニ多量ノ炭酸ヲ含ムノミナ
 ラス亦此一酸化炭素ヲ含ムコトアルヲ以テナ
 リ又鉄鉋風呂ト稱スル浴槽ノ炭火盛ナル片急
 ニ濕雜中等ノ者ヲ以テ下口ヲ塞キ以テ火勢ヲ
 減セントスルコトアリ此ノ如クスレハ火勢能
 ク衰フト雖モ動モスレハ此一酸化炭素ヲ生ス
 ルノ恐アリ慎ム可シ

第八章 塩素、臭素、沃素、弗素

前章既ニ酸、水、窒、炭ノ四素ヲ説ク今此章ニ在テ
 ハ塩、臭、沃、弗ノ四素ヲ説カントス之ヲ前ノ四元
 素ニ較フレハ其性亦大ニ異ナリ之ヲ説カサル
 ノ前先ツ讀者ニ向テ試ニ前事ヲ問ハン曰ク酸、
 水、窒、炭ハ四素ハ何レハ處ニ在リヤ曰ク物ハ焚
 燒ト動植ハ生活スルト其理如何ソヤ曰ク水ト
 空氣ニ就キテ聽ク所何事ソ讀者ノ答フル所蓋
 シ明了ナルヘシト雖モ但此問題意味頗ル廣キ
 カ故或ハ答ニ苦シマンモ知ルヘカラス而ルニ

突然此問ヲ起ス者ハ抑モ主意アリ讀者ヲレテ
 大ニ心ヲ此ニ用ヒシメンヲ要スル為ナリ凡ソ
 書中ノ事讀者ノ記憶ヲ要スル者ハ唯其綱領ノ
 ミ若シ一々記憶シテ遺サントスルモ得ヘカラ
 ス假令能ク之ヲ得ルモ綱領ヲ舉クルノ力ナケ
 レハ死物ニ属シテ活用ナシ英ヲ摺ヒ華ヲ摘ミ
 能ク要領ヲ舉ケテ答ヘン者ハ或ハ化學ノ薰香
 ヲ慕ヒ唯下條ニ説ク所ヲ了會スルノミニアラ
 ス猶ホ其淺近ナルヲ覺ユルニ至ルヘシ然ラサ
 レハ即チ馬耳風ノミ讀者宜シク注意スヘシ

塩素

日常用フル所ノ食塩ハ塩素トソジユムトノ化
 合物ナリソジユムハ前試既ニ之ヲ用フ金属元
 素ノ一ナリ故ニ此塩素ハ食塩ヨリ製出スヘシ
 先ツ左ノ試験ヲ行ヒ其性質大ニ前ノ諸元素ト
 異ナル所アルヲ見ルヘシ

第六十圖



第三十二試驗 食塩ヨリ塩
 素ヲ製スル法 先ツ食塩ハ
 許ト黒色酸化マンガン細末
 等分ト時ニ混和シ前ニ酸素ヲ
 製スル時ニ用ヒタル細口ノ
 玻璃瓶内ニ入レ硫酸ヲ同量
 ノ水ニ混和シ稀薄ニシタル
 者三勺余六分許ヲ其上ニ注

素ノシハニアユ素力第ニ此發臭リ熱燥弯ルキ
 ノ化光忽入ンルト強三ニ法シ取重スノ管長塞
 作合熱チレチ所化キ十三ヲ咽モキル空ヲ管子
 用物ヲ燃テモノ合ニ由試テヲ喉猛気ヲ瓶中以テ護以テ
 ナラ起エ細ニ金スルリ諸塩テヲ害スリ炭ナ引ニ代ノヲ塞
 リ生シテ末トト亦ノ性般塩瓶素ニ瓶ノシハハ彼ノ第ヨク
 トシ塩白トシ名少著重素ヲ恐此レ黄ノ食十リヘシ
 雖タ化煙シツカラスキノ功ノ元素ト化合スルノ
 塩ナルアヲ生素ノル之ヲ以テア素ト殊ニ合スルノ
 素ナチスハ滿金ヲ試ニ塩素ニ氣中ニ先ニ燃
 中尋モニシ是瓶素少許ヲハ乳鉢
 ニ常ニ是レ中ニ許ヲハ乳鉢
 モ物ハトレ物ニ許ヲハ乳鉢
 亦燃燃稱ニ物ニ許ヲハ乳鉢
 ムユス物ニ許ヲハ乳鉢
 ルハ白化合レ鉢ツ燃元

ルア塩ヲ料ア動第心
 ニル素以ヲリ植三コ
 至ヲハテ以之質十ト
 ル以其濕テヲノ四此
 フテ色シ沫試色驗驗
 見其色本ヲタシヤト動塩以
 ヘ漸質ヲ素木綿或ハ及ハ發
 シクヲ分瓶中ニ有物ヨリ取ル所ノ性
 淡ク解シテ無色ト為スノ性
 テテニ投入スヘシ元來
 終ニ色ト為スノ性
 全ク褪色ス

我邦木綿類ヲ晒スノ法ハ專ラ日光ト水ノ作用
 ニ賴ル者ニシテ大約石灰水ヲ以テ木綿類ヲ煮
 之ヲ日光ニ晒シテ數々水ヲ注クノニテ他ニ
 藥品ヲ用フルナシ西洋諸國モ往時ハ亦我カ
 法ト同シカリシカ今時塩素ノ褪色作用ニ賴テ

木綿製造場、染工場、製紙場等ノ處ニ於テ之ヲ用
 フルコト家モ多シトス此物又有毒不潔ノ物ヲ
 分解シテ無毒清潔ノ物トスルノ効アルヲ以テ
 病毒發生ノ處ニ用ヒテ貴重ノ消毒藥トス凡ソ
 此等ノ事ニ用フル塩素ハ石灰中ニ吸收セシメ
 タル者ニシテ之ヲ漂白粉ト謂フ東京、西京等ノ
 洋紙製造場ニ於テハ之ヲ用ヒテ木綿屑等ノ紙
 料ヲ晒スト雖モ未タ普ク木綿晒場等ニ用フル
 ヲ聞カス惜イ哉
 塩酸 一名 塩化水素酸 又曰 海塩酸 塩酸ハ無色、

透明、酸味ノ氣ニシテ塩素ト水素ノ化合物ナリ
 塩素ハ水素ト化合スルノ力太タ強シ若シ二物
 ヲ混シテ強烈ノ日光ニ曝セハ急ニ化合シ大聲
 ヲ發シテ塩酸ト為リ陰處ニ置クモ亦徐々化合
 シテ塩酸ト為ル此物能ク水ニ溶解スルノ性アリ
 リ尋常單ニ塩酸ト稱スル者ハ即チ其水ニ溶解
 シタル者ナリ
 第三十五試驗 試ニニ塩酸ヲ製セシニハ前文
 塩素製法ノ裝置ヲ取リ食塩十匁許ヲ細口玻璃
 瓶ニ入レ強硫酸二十匁許ヲ其上ニ注キ塞子ヲ
 以テ瓶口ヲ塞キ全ク塩素ヲ製スルノ法ノ如ク
 スレハ塩酸氣モ亦空ヲ得ヘシ又次ノ試驗ニ供ス
 瓶中ニ聚ムルコトヲ

フニ火ヲ用フルハ其功速ニ成ルト雖モ必ラス
 シモ之ヲ要スルニ非ス一兩日暖處ニ放置スル
 モ其功相シキルハ却テ安全ナルヲ以テ
 ト謂フハ蓋シ弗化水素ハ其性劇毒ナルヲ
 テ試験中此而ルモ火ヲ用フルコトニ最モ注
 サル可シテモ速ニテ動モスレハ吸入スル
 ヲモ速ニテ動モスレハ吸入スルノ恐ア
 ルヲ以テナリモスレハ吸入スルノ恐ア
 弗化水素ノ性此ノ如キヲ以テガラス面ニ精細ノ
 線書畫ヲ頭ハスニ此物ヲ用フルナリ

第九章

硫黄

硫黄ハ黄色ノ固體元素ニシテ其游離スル者ハ
 火山及ヒ其近傍ニ産シ化合スル者ハ多ク銅鉛
 等ノ鑛石ヲ成ス此物少シク熱ヲ加フレハ溶解
 シテ液體ト為リ自ラ燃エテ青焰ヲ發シ無色ノ

氣體ヲ生ス此氣能ク鼻喉ヲ刺戟シ咳嗽ヲ發セ
 シムルコトハ人ノ皆能ク知ル所ナリ是レ硫黄
 ト空氣中ノ酸素ト化合シテ亞硫酸ト稱スル酸

化物ヲ生シタルナリ
 第三十九試驗 硫黄ノ燃エテ生スル者即チ亞
 硫酸ハ能ク物色ヲ褪消スルニ性アリ試験ヲ以
 テ之ヲ知ルヘシ其法先ツ小皿ニ硫黄少許ヲ入
 レ左右ニ箸ヲ横シタテ去リ桔梗或ハ薔薇ノ如
 タルガラス鐘ヲ取リ塞リ水ヲ以テ濕シ其上口ヨリ
 有色草花ヲ取リ塞リ以テテ鐘中ニ懸ケテ覆フ由
 有テテ鐘中ニ懸ケテ覆フ由

第七十圖



ル亞硫酸ハ此性アルカ故西洋諸國之ヲ用ヒテ
 絹帛ノ類及ヒ其他塩素ヲ以テスレハ其質ヲ損
 害スル一切ノ者ヲ褪色ス此物亦病毒ヲ消シ腐
 敗ヲ防クノ効アリ傳深病ノ消毒藥或ハ防腐藥
 ニ賞用ス

硫黄ノ用尤モ廣シ一二ヲ舉クレハ木炭硝石ノ
 二物ニ和シテ火藥ヲ製シ又我カ在來ノ附木及
 ヒ擦附木ニモ之ヲ用フ是レ此物ノ燃工易キカ
 故ナリ又最モ多ク之ヲ用フルハ硫酸ノ製造ナ
 リ
 硫酸又綠礬油皆指ハ硫黄ト酸素及ヒ水
 硫酸ハ油ハ如キ液體ニシテ硫黄ト酸素及ヒ水

素トノ化合物ナリ其質重ク幾ント水ノ二倍ナ
 リ此物功用極メテ廣ク啻ニ塩酸硝酸等酸類ノ
 製造ニ於テ必要トスルノミナラス又諸般ノ技
 術製造等之ヲ欵ク可ラス故ニ百工製造ノ盛ナ
 ル國ハ之ヲ用フルコト太タ多シ是ヲ以テ國中
 費ヤス所硫酸ハ多少ヲ以テ其國百工製造ノ盛
 不盛ヲ徴スヘシ
 硫酸ノ用此クノ如キヲ以テ開明ノ諸國ハ之ヲ
 製スルノ頗ル多シ近年我邦ニ於テモ亦之ヲ大
 坂ニ製造ス明治九年ニ在テハ一歲ノ製造高大

約百二十萬斤其量少カラサルカ如シト雖凡百
 工製造ノ盛ナル西洋各國ニ比スレハ尚ホ大海
 ノ一滴ニ過キス之ヲ製スルノ法鉛板ヲ以テ數
 個ノ大室ヲ造リ硫黄或ハ多量ノ硫黄ヲ含ム物
 ヲ取り燃ヤシテ亞硫酸ト為シ之ヲ其室内ニ導
 キ水蒸氣ト三酸化窒素ヲ酸化セシムルモ
 觸レシメ以テ硫酸ヲ生セシム是レソノ大略ナ
 リ
 第四十試驗 硫酸ハ最モ好シテ水ヲ引クノ性
 アリ試シニ小量ノ硫酸ハ最モ好シテ水ヲ引クノ性
 氣中ニ曝セハ其重サ大ニ増スルニ由ルナリ是レ空
 氣中ニ在ル水蒸氣ヲ吸入スルニ由ルナリ是レ空

以テ動植諸物ノ質ニ硫酸ニ觸ルハ多クハ炭
 為リ糖ト小皿ニ入レテ蒸焼シタルハ如クハ
 砂糖ヲ解シ水ニ溶カセテ試シテモ亦同シ
 炭素ノ殘留スル木片ニ硫酸ト滴テモ亦同シ
 故ニ此物ヲ操作スルニハ最モ注意シテ熱ヲ起
 服等ニ觸レキハ強キヲ以テ盛リテ後チ徐カニ
 此等ノ如ク強キヲ以テ盛リテ後チ徐カニ
 スコト亦甚ク故ニ水ヲ攪和セリテ後チ徐カニ
 トセハ先ツ水ヲ攪和セリテ後チ徐カニ
 シテガラス片ヲ以テ攪和セリテ後チ徐カニ
 水ヲ加フ可ラステ攪和セリテ後チ徐カニ
 ニル少許ヲ試シテ熱管ニ入レリテ注意ス
 混和スレハ今大熱管ニ入レリテ注意ス
 至ルヘシ今大熱管ニ入レリテ注意ス
 字ヲ寫シテ今大熱管ニ入レリテ注意ス
 置ケハ漸々黒字ヲ現ハス如シト雖凡百
 蒸散シテ硫酸ノ殘リ是テ其紙ニ侵蝕シテ硫酸ト雖凡
 素ヲ離ス者ナリ是テ其紙ニ侵蝕シテ硫酸ト雖凡

終ニ能ク衣服等ヲ腐蝕スルニ至ルヲ知ルヘシ
 硫酸ハ亦能ク多クノ金屬ヲ溶カシ種々ノ化合
 物ヲ生ス例ヘハ銅ヲ溶カセハ膽礬銅ト硫酸ヲ
 生シ鉄ヲ溶カセハ綠礬鉄ト硫酸ヲ
 ヲ溶カセハ皓礬亞鉛ト硫酸ヲ生スル是ナリ

硫化水素

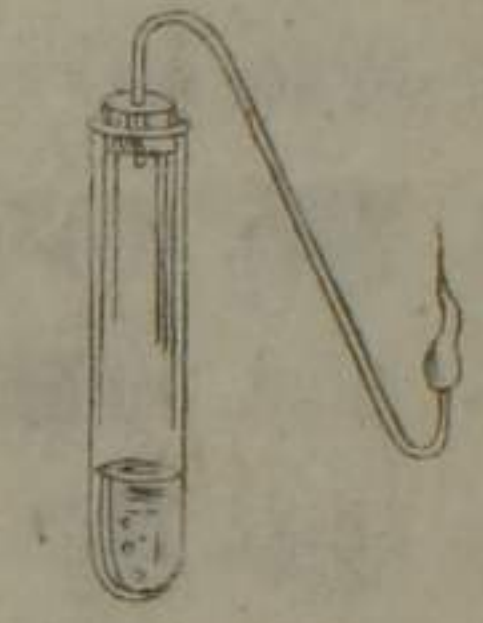
硫化水素ハ硫黄ト水素ト化合シテ成ル氣體ニ
 シテ其臭特殊ナリ鑛泉ノ一種硫泉ト稱スル者
 相州宮根芦ノ湯其他總テハ皆自然ニ此氣體ヲ
 硫黄ノ臭氣アリト云フ者
 溶含スル者ニシテ其臭氣ハ固ト硫黄ノ臭氣ニ

非ス全ク硫化水素ノ臭氣ナリ此物鑛泉中ニ在
 テハ醫治ノ効用アレ氏之ヲ呼吸スレハ害アリ
 動物諸質中硫黄ヲ含ム者腐敗スル時ハ亦此氣
 ヲ生ス鶏卵腐敗シテ惡臭ヲ發スルカ如キハ即
 チ是ナリ

第四十一試驗 固體硫黄ヲ製スルノ便法ハ硫
 化鉄ト稱スル如クスルニハ硫黄ト鐵ト化合シテ
 鐵中ノ硫黄ト硫酸中ノ水素ト相互ニ稀硫酸ヲ注ク
 水素ヲ生スルト相化合シテ先ツ硫酸ヲ太
 キ試験管ニ硫酸鉄少許ヲ入レトスルハ先ツ
 滴レテ管ノ如ク玻璃管ヲ塞ル子ヲ以テ
 其口ヲ塞キ頻ニ玻璃管ヲ水素ト至リ
 試ニ其管端ニ火ヲ點スルハ即チ燃エテ水ト
 亞硫酸ヲ生ス是レ其氣中ニ含ム所ノ水素ト硫

黄兩ナカラ空ノ酸素ト化合スルニ由ルナリ
 今其焰中ニ白キ燐ノ器ヲ挿入シテ其面ニ
 硫黄ノ附着スルコト如シ是ヲ以テ此氣體ハ硫
 二烟煤ノ附着スルカトシテ又ハ水素ト化合シテ
 黄ノ如シトシテ又ハ水素ト化合シテ

圖八十第



ルニ液ヲ取リ各之ヲ盛テ試管ヲ少ク熱スルニ及ヒ
 酸ヲ滴加シテ先ツ膽礬ニ入レテ其氣ヲ通
 一即チ硫酸ニ溶解シテ其氣ヲ通
 ハ即チ硫酸ニ溶解シテ其氣ヲ通
 合シテ水素ヲ得ルニ至ル
 水素ヲ得ルニ至ル
 ト雖モ之ヲ以テ其性質ハ亦忽チ見ス
 色ノ物ニ化シテ其性質ハ亦忽チ見ス
 スヲ以テ其性質ハ亦忽チ見ス

所ニテ之ヲ注ケハ黒色物ヲ生スルコト
 ハ人ノ能ク知ル所ナリ其理亦緑礬ニ
 ヒアムモニテアテ以テ黒色ノ物ヲ生
 同一定ニ生スル者ナリ
 リ一箇中ニ生スル者ナリ

第十章

硅素、硼素、磷、砒素

硅素

硅素ハ自然ニ游離シテ存スルコトナシト雖モ
 化合シテ存スルコト太多シ凡ソ地球外部ノ
 固體即チ土中此元素ヲ含マサル者殆ント稀ナ
 リ砂、水晶、燧石、瑪瑙ノ如キハ皆硅素ト酸素ノ化
 合物即チニシテ其他凡百ノ土石ハ大約皆硅素

小酸素及ヒ金屬元素トノ化合物ナリ抑モ地球
 ノ外部ヲ成ス所ノ物ハ皆硅素ヲ主トシテ數元
 素ノ酸化シタル者ニシテ其始メ實ニ硅素等數
 元素ノ燃燒ヨリ生シタル者ナリ此說頗ル恠ム
 ヘキニ似タリト雖モ地球ハ本ト固體ニ非ス其
 今日固體ヲ為ス者ハ唯地熱ノ減少セルニ因ル
 若シ之ヲ熱スルコト極メテ猛烈ナレハ獨リ熔
 ケテ液體ト為ルノミナラス或ハ變シテ氣體ト
 為ルヘシ蓋シ地球ハ本ト其熱太々猛烈ニシテ
 氣體ナリシカ其熱漸ク減少シテ先ツ液體ト為

リ終ニ今日ノ固形ト為ル其形ヲ變スルノ際硅
 素等ノ數元素ハ酸素ト化合シテ燃エタルコト
 亦疑フ可ラス
 硅素ハ固體ニシテ或ハ褐色ノ粉末ト為リ或ハ
 黑色ノ結晶ト為ルアリ砂水晶燧石等ヨリ酸素
 ヲ除キ去レハ此元素ヲ得ヘシト雖モ初學ノ者
 遠カニ試驗シ易カラス故ニ略シテ試法ヲ載セ
 ス
 上ニ言ヘルカ如ク硅素ノ化合物ハ地球上多量
 ニ散在シテ諸ノ土石ヲ成スカ故之ヲ取テ工事

ニ供シ或ハ陶器、玻璃等ノ製造ニ供スヘキ土石類ノ中石灰石ト大理石ノ二物ヲ除カハ亦皆硅素化合物ナルコト今又論スルヲ要セス陶器ハ概スルニ粘土ヲ主トシテ燒製シ玻璃ハ砂、燧石ノ如キ硅酸ヲ基トシテ或ハ石灰ト炭酸「ソーダ」ヲ混シ或ハ鉛丹ノ如キ酸化鉛ト炭酸「ポッター」ヲ混シ熔製シタル者ナリ其陶器、玻璃器ヲ着色スルニハ酸化金属酸化金属元素ト化合物ヲ以テス例ヘハ無色トシテ玻璃ニ銅ノ酸化物ヲ混シ熔カセハ青色或ハ赤色ト為リ黑色酸化「マンガ」ヲ混シ熔

カセハ紫色ト為ル又陶器ノ青花畫ト稱スル者ハ「コバルト」ト名ツクル金属元素ノ化合物ヲ以テ熔カシタル者ナリ陶器ハ我國各地多ク製造シ之ヲ外國ニ輸出スト雖凡玻璃器ニ至テハ其製未タ精良ナラス多クハ酸化鉛ヲ含ムノ種類ニ止マリ製造亦未タ多カラス是ヲ以テ多ク外國ヨリ輸入ス

硼素

硼素ハ固体元素ニシテ或ハ結晶スル者アリ或ハ結晶セサル者アリ此物游離シテ存セスト雖凡酸素トソジユムトニ化合物ナリテ自然ニ産スル者ナリ水素ニ化合シテ硼酸トナリ有用ノ化合物トス硼砂ハ金類ノ細工等ニ於テ有用ノ化合物トス

燐

燐ハ自然ニ游離シテ産セスト雖ヒ酸素及ヒ「カ
 ルシエム」ト稱スル金属元素ト化合シテ燐酸「カ
 ルシエム」ト為リ花崗石等太古ノ岩石中ニ存在
 ス而ルニ此岩石漸々破碎シテ地上ニ散布スル
 ニ由リ燐酸「カルシエム」亦遍ク地上ニ散在ス植
 物之ヲ吸取シテ種實ノ中ニ蓄ヘ動物種實ヲ食
 フテ體中ニ燐酸「カルシエム」ヲ聚ハ骨中殊ニ多
 シトス凡ソ一切動物ノ骨多クハ燐酸「カルシエ
 ム」ヨリ成ル此物皆植物ノ媒ヲ經テ地ヨリ得ル

所ナリ故ニ骨ヲ燒ケハ白塊ト為ル謂フ所骨灰
 ニシテ即チ燐酸「カルシエム」ナリ故ニ燐ヲ製ス
 ルニハ動物ノ骨ヲ以テス
 燐ノ状蠟ニ似テ軟カニ其色黄ニシテ固體其性
 極メテ燃エ易シ是ヲ以テ必ラス之ヲ水中ニ貯
 フヘシ之ヲ操作スルニハ亦必ラス手ヲ以テス
 可ラス又燐ノ一種ニ赤燐ト稱スル者アリ赤色
 ニシテ尋常ノ燐ノ如ク燃エ易カラス其状亦大
 ニ異ナリ然レモ是レ唯外状ノ異ナルノミニシ
 テ本質ハ固ヨリ同一ナルコト猶ホ金剛石ト木

炭ト其狀全ク異ナレ氏其質ニ至テハ共ニ同シ
 ク炭素ナルカ如シ
 第四十二試驗 今試驗ヲ以テ黄色燐ノ燃ユ易
 キト赤色燐ノ燃ユ易カラサルト及ヒ其ニ物同
 質ナルトサ知ルヘシ先ツ水中ニ於テ黄色燐ノ
 一試験片大サ米粒ノ如キ者ヲ切リ取り前ニ酸
 ノ試験ニ於テ軟紙ノ操作ヒシカ如ク能ク注意シ
 テ杉原ノ如キ軟紙ノ間ニ狭キ其濕ヲ拭ヒ箸ヲ
 以テ之ヲ十能或ハ其他得易キ金屬板ニ載セ又
 此燐ト同シ大サ燐ノ赤色燐ヲ其板上ニ載セ火
 近ツクハ黄色燐ト暫時ニ其燃ユルニ生スル所
 ノ煙ヲ發ス是レ燐ト酸素ノ化合ニ生スル白色
 ナリ然ルニ赤色燐トハ終ニ亦燃ユテナシ
 ト雖ハ之ヲ熱シテ止マサレハ終ニ亦燃ユテナシ
 煙ヲ發スルニ毫モ異ナラサルニ是レ其質
 赤色燐ハ黄色燐ノ如ク燃ユ易カラサルニ其質
 ハ固ヨリ同ナルヲ知ルヘシ

黄色燐ハ之ヲ以テ種々ノ藥品ヲ製ス下雖氏其
 性毒アルヲ以テ殊ニ殺蟲藥ヲ製スルニ用フ赤
 色燐ハ擦附木箱ノ粗糙ナル側面ヲ造ルニ用フ
 此燐燃ユ易カラスト雖氏擦附木ノ端ニ著ケタ
 ル混合物ヲ以テ之ヲ擦レハ忽チ燃ユ且ツ無毒
 ナルヲ以テ之ヲ用フルナリ
 燐化水素 燐ト水素トノ化合物ナリ之ニ三種
 アリ一ハ氣體一ハ液體一ハ固體ナリ今氣體ノ
 燐化水素ニ就テ言ハシニ此物燐ヲ含ムノ有機
 體 人体及ヒ禽獸蟲魚 自然ニ腐敗スル時或ハ苛
 等ノ動物体ヲ云フ

性「ホッパ」ス溶液ヲ以テ燐ヲ熱スル時ニ方リ發
生スル所ニシテ其性劇毒惡臭アリ若シ液體燐
化水素ヲ混スル時空氣ニ觸ルレハ忽然自ラ燃
ユルノ奇性アリ世人ノ妖トナシ恠トナス陰火
ノ如キハ其理未タ詳カナラスト雖凡蓋シ燐化
水素ノ自燃ニ係ル者ニシテ必ラスシモ狐狸冤
魂ノ所為ニ非サルナリ
砒素ハ之ヲ非金屬中ニ列シ爰_之ヲ說クト雖
凡其性質非金屬元素ト金屬元素トノ中間ニ在

ル者ニシテ大ニ燐ニ類似スル所アリ然レ凡其
狀亦金屬ニ異ナルコトナシ故ニ之ヲ兩屬ノ者
ト見做スヘシ此物稀ニ游離シテ産スト雖凡通
常鉄其他二三ノ金屬元素及ヒ硫黄等ニ化合シ
テ産スル者ナリ
砒素ヲ製スルノ法先ツ空氣流通ノ好キ處ニ於
テ此元素ヲ含ム鑛石ヲ燒キ以テ砒素ヲ白色ノ
酸化物ト為シ之ニ木炭ヲ混シ熱ムレハ酸化砒
素中ノ酸素ハ木炭ト化合シテ炭酸ヲ生シ砒素
ヲ分離セシムルヲ得ヘシ

砒素及ヒ其化合物ハ劇シキ毒性ヲ有スルニ由
 リ最モ注意シテ之ヲ操作スヘシ決シテ妄リニ
 操作ス可ラス從來此性ニ本ツキ砒素ノ化合物
 ヲ以テ鼠取蠅取ノ藥ヲ製セシカ現今官禁ヲ以
 テ製スル者ナシ砒素ハ之ヲ鉛ト合セ彈丸ヲ製
 スルノ外多ク用フルコトナシト雖氏亞砒酸一名
 白砒ト稱スル酸化物即チ砒素ヲ含ム鑛石ヲ大
 石氣中ニ燒キテ生スル者
 ハ西洋緑青及ヒ其他砒素化合物ヲ製スルノ元
 品ナルノミナラス亦殺蟲藥等トシテ太夕要用
 ノ者ナリ又畫工ノ用スル雄黄雌黄ノ二物ハ自

然生ノモノニテ共ニ砒素ト硫黄ノ化合物ナリ
 又礬石ト稱スル者ノ一種黄色粉アリ是レ砒素
 ト硫黄ヲ含ム鑛石ヲ蒸焼シテ製シタル者ニテ
 内國産ノ人造雌黄ト云フヘキ者ナリ但シ西洋
 ニ於テハ亞砒酸ト硫化水素ヲ以テ此物ヲ製ス
 ト云フ
 以上數端非金屬元素ノ中竊モ有要ノモノヲ略
 説ス金屬元素ニ至テハ説テ後卷ニ在リ就テ講
 習セヨ

